

強迫性障害の現在とこれから

コーディネーター 切池 信夫

強迫性障害(OCD)が薬物療法や認知行動療法などにより改善することが明らかとなり、多くの精神科医の日常臨床や研究の対象となって久しい。しかし、いまだ発症機序は不明で、診断基準においてもDSM-Vの改定作業が進むなかで、意見が一つにまとめるにむづかしい現況が浮かびあがり、「群盲、象を撫でる」の感を否めない。さらに治療においても、薬物療法にて容易に改善する症例から治療抵抗性の症例まで多様で、治療反応性をめぐりOCDの脳内神経回路網の論議に余念がない。このような状況で、OCDについて最近のトピックを取り上げ、現況と今後の課題を浮かびあがらせ、一人でも多くの精神科医に興味を持っていただけることを期待してこのシンポジウムを企画した。各演者はこの領域で活躍されている精神科医である。

多賀千明先生は「OCD診断の変遷と「強迫」の定義の再考」と題して、OCD診断において「強迫症状の不合理性の自覚」の重要性を強調された。さらに症例を呈示し、薬物療法にて良好に反応して改善した症例と、広汎性発達障害を併存し、治療抵抗性の症例を紹介された。そして後者の症例を通して強迫の捉え方、診断及び治療上の問題点などを指摘していただいた。

住谷さつき先生は「OCDの病態：神経化学的

側面を中心に」と題して、OCDは精神薬理的にセロトニン仮説だけでは説明できず、ドパミン系やグルタミン酸系の関与も想定しなければならないことを述べられた。そしてOCD患者の薬物応答性の違いにより、臨床特徴が異なること、プロトンMRSにより脳内代謝物変化に差異が認められることなど、自らの知見を紹介された。さらに分子遺伝学的研究についてもふれられ、今後の活躍が期待される場所である。

中尾智博先生は、「OCD病態研究のupdate; neuroimaging studyの知見から」と題して、OCDの脳画像研究に関する最新の知見を紹介された。OCDの病態には脳の構造や機能の異常が深く関与しており、前頭眼窩面や尾状核の過活動性は一致した所見として捉えられているが、その他の部位に関して所見が一致していないようである。そしてOCD-loop仮説に関して、OCDの症候や治療反応性の異種性を考えると、これだけで説明するのが困難であることを指摘された。そして脳画像所見を治療反応性の予測に応用できる可能性についても言及された。今後において、新知見が望まれる場所である。

金生由紀子先生は、「チック障害との関連によるOCDの検討」と題して、まずチック障害について説明され、そしてチック障害と強迫症状、

OCD 障害との関わりについて述べられた。チックは全く自覚せずに自動的に起こる場合と、やらずにはならないとの感覚に伴って起こることもあり、強迫行為との鑑別が困難な場合が少なくなることや、チック障害に OCD を併存している患者の臨床特徴など自験例を通して紹介された。そしてチック障害との関連から、より均質な OCD を抽出できる可能性を示唆された。

松永寿人先生は、「DSM-V に向けた強迫性障害 (obsessive-compulsive disorder) の動向」と題して、自ら DSM-V の改定作業部会の委員をしている立場から最新の動向について話された。

OCD と不安障害カテゴリーとの関連、強迫スペクトラム障害の概念、OCD の下位分類システム、次元的分類法などについて言及された。診断基準に関して、なかなか意見がまとまりそうにない現況のようである。

以上各先生から、OCD をめぐるホットな諸問題について講演していただき、会場からも活発な討議をいただいた。討議の時間が少なかったのが心残りとするところであるが、今後このシンポジウムを契機として、OCD の研究がより活発になり新しい知見が増すことを期待したい。